

ザ・百済山城スタンダード

2006年11月25日、韓国・清州市で韓日古代山城研究セミナー（韓国城郭研究会主催）が開催されました。このセミナーにあわせて、忠清北道や慶尚北道にある山城もいくつか踏査してきました。踏査に際しては、忠北大学校や中原文化財研究院の方々に丁寧な現地説明をしていただきました。ここでは、そのうちのひとつ、栢嶺（ペクリョン）山城をとりあげて紹介します。

忠清北道の錦山（クムサン）は、現在では朝鮮人参の特産地として有名で、高速道路の錦山SA（休憩所）には人参館があるほどです。

栢嶺山城は、錦山の市街地から車で30～40分の場所にあります。錦山の市街中心からは南西の方角。そこから錦山邑を経て進朶山を越え南二面（ナムイルミョン）に入り、乾川里（コンチョンリ）へ抜ける地方道635号線沿いに位置します。この城跡の東側は「駅坪里（ヨクピョンリ）」といい、歴史地理の専門家には色めく地名があります。古代以来、交通の要衝とされた「炭峴」に比定されている場所です（全榮来『百済滅亡と古代日本』雄山閣、2004）。

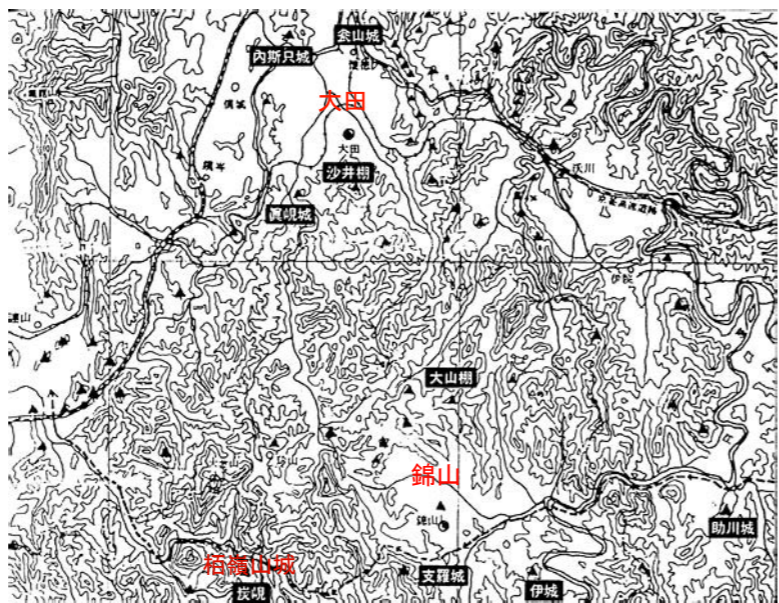
栢嶺山城は、忠清南道と全羅北道の境界付近の山嶺に位置する百済時代に築かれたものです。660年7月、新羅軍は百済軍を黄山原で撃破しますが、この山城は報恩の三年山城から南下して来た新羅軍の経路に位置しており、朝鮮戦争でも激戦が繰り広げられた場所です。

城跡に続く尾根上には駐車場が完備されています。そこに車を停めてから栢嶺山城跡へと向かうのが最も便利ですが、城跡へのアプローチは、朝鮮戦争で命を落とした人たちのために築かれた戦勝碑・慰霊碑（「600高地戦跡碑」）への通路にほかなりません。城跡へ行くためにはそれらのモニュメントの裏を廻りこむ必要があり、案内板に注意しておかないと慰霊碑に隠れて城跡の存在に気づかない恐れがあります。

韓国の古代山城というと、城壁が山中を廻っているものがイメージされるでしょう。栢嶺山城は古代山城の中でも、学術用語でいうとテメ式（鉢巻型）の山城に分類されています。まさに、眼下に峠道を押さえる尾根上に城壁が廻らされている姿はテメ式ということができます。しかし、古代山城に馴染の少ない方には、単郭式とでも説明したほうがイメージがしやすい城郭かもしれません。というのも、城壁がぐるりと山腹を廻っているというより、尾根上の狭い範囲を城壁で区画しているといったほうが実態に近い



写真1 栢嶺山城（北から）



錦山周辺の城郭（全榮来前掲書より）

からです。城壁規模と城壁（全長200mほど）によって区画される城内（曲輪というほうがわかりやすい）のバランスからすると、尾根上に高石垣を築き（写真1）、平坦面を造り出した城郭にしか見えません。

栢嶺山の城内は幅の50～60mといったところでしょうか。城内には南と北に各1つの城門跡があります。城内の面積からすれば門は大きいといえるでしょう（壱岐の勝本城を彷彿させます）。それも写真2のように、城内に入ると通路がすぐに90度屈折します。城外側は懸門式となっており、百済の山城遺跡では最初に見つかった懸門だということです（案内板による）。また、この城内からは木槨庫が発掘されています（写真3）。床面と壁面には板材が張られ、床面には十字形に角材が敷かれて4区分されているのがわかります。そして壁面には柱が等間隔に立ち上がっていますが、これは木槨庫の天井部を支える梁を乗せるためのものと推測されます。掘り込んだ地山と板材の間に厚さ12cmの粘質土が充填されていたことから、この木槨庫は貯水用と見られています。なるほど韓国の山城では、城内に池を備えている例が少ないのですが、テメ式で城内の面積も狭小となれば、こうした施設を工夫しないと水の確保は難しかったでしょう。それにしても念の入った造作で、格の違いを感じます。

また、この城で注目されるのは、多量に出土した瓦です。なかでも銘文瓦と呼ばれるものは、この山城の性格を考える上で貴重な史料と評価されています（以下、姜鍾元「錦山栢嶺山城の調査成果と築造背景」 訳：寺岡洋、を参考にした）。

まず、これらの瓦が、城が廃棄された当時の堆積層から出土し、瓦の種類はその堆積層内においてほぼ同一の様相を呈するとされています。すなわち、出土した瓦はある特定時期に集中的に製作・使用されたことを示しています。銘文瓦にはほかに、「丙」字銘印章瓦3点が含まれています。印章瓦は泗泚期以降、扶余や熊津などの王宮に関わる遺跡から出土しているため、栢嶺山城は中央から派遣された技術者によって築造、維持された可能性が高いとも指摘されています。中央からの技術者による築城であっても不思議はありません。『三国史記』卷二十八（義慈王）では「白江・炭峴我国之要路也」とありますし、印章瓦や木槨庫の出土から、有力な官人が在城する山城だったとも考えられます。

遺物は百済泗泚期の百済土器に限定され、さらに干支を示す銘文瓦と文献史料から596～598年頃百済によって築城され、百済滅亡とともに廃絶、その後の再利用はなかったと考えられます。つまり、百済以外の手が入る余地はなかったということになります。このことは、栢嶺山城が百済の山城研究の基準になる城郭遺跡であることにほかなりません。城の運用時期が明確でかつ後世の改修が及んでいない城は、この国では非常に珍しいといえるでしょう。

韓国の研究者との交流を通して、こうした城郭遺跡の詳しい情報を共有することができれば、日本における古代山城研究も深まるのは間違いありません。とはいうものの、お酒に強くないと結構辛いかもしれませんけど。



写真2 南門跡



写真3 木槨庫

（※情報『백제 산성의 이해』 주류성, 2004より）



写真4 城内の現況